

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | 文化發展の諸學説  |
| Author(s)   | 銅直, 勇   |
| Citation    | 經濟論叢 (1919), 8(5): 705-711  |
| Issue Date  | 1919-05   |
| URL         | <a href="http://dx.doi.org/10.14989/127520">http://dx.doi.org/10.14989/127520</a> |
| Right       |   |
| Type        | Departmental Bulletin Paper   |
| Textversion | publisher   |

## 文化發展の諸學說

銅 直 勇

社會進化と文化發展とは往々にして混同せられる。然し社會進化とは社會及其組織の進で、文化發展とは所謂文明文化の進化を意味するのである。此の兩者の概念の差別を截然と別たないが爲めに誤れる理論が生ずるのである。動物界に社會ありやといふ問題も此の二概念の混同から生ずるのである。蓋し文明文化は人間

社會の特産物で、一切の人類團體は其の如何なる階段にあり如何なる性質を有するものたるを問はず人類といふものゝ生じたる當初からして文化を有せないものは無いのである。然も人類以外のもので文化を有するものは無い、蜂や蟻は社會はこれを有して居るが文化はもつて居ない。然るに動物の結合と人間社會との差別を明にしないが爲めに社會進化社會進歩を單邊的に見て他の種々なる特殊の因素を看過するのである。

願ふに社會進化は其の初生期に於ては有機的進化である。一切は營養、再生、防禦等の必要によつて嚴格に決定される。即ち嚴格なる生物學的地理學的決定論が彼等の社會生活の全般を支配して居るのである。かゝる生物學的要素も亦人類の社會生活に顯著に現れてゐる。今若し此等の因素のみが人類の社會生活を説明するに十分なる基礎を與ふるものであるならば、人間社會學も亦嚴密なる生物學的地理學的決定論であらう。現に多くの社會學者も遠慮なく此の假説

を採用してゐる。然し蹴つて考ふる時人間社會の進化を他の一般有機的進化と切放して考へる事は吾人の智識の擴大するにつれて不可能となつて來て居る。例へば出生、死亡、人口増加、民族、食料、地理的環境及び人間社會に於ける淘汰作用等は確に人間社會進化の一部分ではある。然し文化的事實は此等の有機的生物學的事實を變化せしむることが出来る。有機的生物學的事實のみで文化的事實といふ事は出来ないのである。例へば雌雄關係、夫婦關係及び家庭生活の如きは人間以下の動物にも多く共通したものであるが故にそれ自身では文化的事實では無いのである。要するに生物學的事實と文化的事實とは相互に影響を及ぼしあふものであつて、此の相互關係は人間社會に於て最も深甚なるものがある。

右の如く社會進化の過程は文化發展の過程よりも廣いものである。即ち社會進化が有機的進化の中に起つ又これから發達するやうに文化發展も亦社會進化の中に起つ又これから發達する

のである。今有機的進化に於て心理的刺戟及反應が一新進化的系列を發展せしむる基礎となるやうに社會進化に於ても亦或る新發展が他の新進化系列の基礎とならねばならぬ。其の新系列とは人間團體に於て世代から世代へと傳襲によつて傳へられたる「複雑なる後天的活動」の系列で、これが文化又は文明の内容となるのである而してこの新發展を明にするは人間社會學最要の問題である。何となれば文化によつて人類の社會生活は動物のそれよりも遙に複雑となつてゐるが故に人間以下の動物社會學を以て人間社會に對せんとするは全く妥當を缺いてゐるからである。然し文化發展の理論を研究する前に先づ人類文化の主要なる事實は何であるかを見る必要がある。而して其の第一は人類が道具を製造する動物であるといふことである、即ち人間が發明の能力をもつてゐるといふことであるかくして産業は起り此の産業を基礎として文明の全造營が築かれたのである。然し發明といふことを廣義に解する時は此等の道具が作られた

と同時に既に言語が發明され進化してゐたと見  
るが正確なるやに見える。言語の發生と同時に  
これによつて智識及熟練の傳達が行はれねばな  
らぬ。かくして幼稚ながら科學と藝術とが起る  
又言語を以ての交通によつて人類がその共同  
生活の習慣及方法に就いての團體的反省が行  
はれ、その結果遂に團體の慣習中或は認容され  
或は非難さるゝものが出来る。慣習的道德はか  
くして生じ、更に宗教が現れ終に政府を組織す  
るに至るのである。さて此等の一切、即ち言語  
産業、科學、藝術、道德、宗教、政府、約言す  
れば人間の全制度及成業が人類文化の總計  
及實質を形成するのである。此等は獨り人類の  
みに存して人類以下の動物の全く缺如せる所の  
ものである。

扱て最近前史プレヒストリク的考古學及文化の人類學に於ける  
進歩は此等文化發展の種々な系列に於ける主  
要事實を科學的知識に持來した。吾人はこれに  
よつて人間社會進化の十分なる理論を得る準備  
を與へられて居るのである。

然し先づ序言として生理的人類學の主要なる  
決論を示さう。人間の直立の姿勢は既に人類學  
者も一般に人類發達上の顯著なる特徴又は主要  
なる事實とは考へない。手の自由化及發達も同  
様である。只人類學者の認むる所によると人類  
の人類としての特徴は實にその腦髓である。人  
類をして人類たらしめたのは腦髓であつて、腦  
髓が特別なる人間的能力及び機能を與へられて  
愈々益々増大したからである。然る時これと殆  
んど同時に通話力と關係ある咽喉部の發聲機關  
の發達が起つたに相違ない。かくして人類の腦  
髓中樞を愈々高等ならしめる作用と發聲能力を  
生ぜしむる作用とは両々相俟つて人間社會生活  
に於ける一切の顯著なる諸形相を生ずるのであ  
る。彼の直立の姿勢、手の自由は人間社會生活  
に對しては甚だ重要ではあるが、右の二作用に  
次ぐ第三因素となるのである。

吾人はこれだけを注意して置いて次に人類文  
化の起源及發達に就いての主要學說を簡単に考  
案して見たいと思ふ。

第一 は地理的環境說で、此學說は各地理的地盤はその氣候及一般の地理的條件に適當した動植物を作り出すといふのである。即ち人類の文明は木の實と同じく、氣候と人種の條件とによつて作り出されるといふのである。然し生物學者が有機的進化の動力は環境の自然淘汰であるといふ説を捨てたるが如く、人類學者も亦地理的環境の淘汰作用は文化發展上の一小因素に過ぎないと考へてゐるのである。ゴールツンマイザーのいつてゐる如く文化は本質的に動的であり環境は靜的であるといふことを考へる時は物理的環境を以つて文化の決定者と見る企圖に對して直ちに疑念が生ずるのである。吾人が原始的狀態から文明狀態に進歩するに従つて愈々益々團體の物質的文化がその物理的環境に依屬することが少くなるのである。これと同じ考でローウィーも環境は文化的造營の建築者に煉瓦と漆土を與へたけれども建築家の設計を與へないといつて居る。此の説は新派の人類學者の態度を示すものとして特に重要である。彼等は地

理的環境の勢力を認めるが其の創造性を否定し創造的因素を個人としての人間或は文化そのものに認めんとするのである。かくの如く地理的歴史觀は近世の科學的見地から人類の文化を探究した最初の假說の一であるがこれは最も不十分なものである。

二は心理的偶然模倣說で近代の文化發展の人類學的學說は凡て此種の心理學的名辭で表されて居る。此說によると例へば初めて石器が作られた際の如く初め或る偶然的に出來たものが模倣の過程によつて傳へられるのであるといふのである。此説を極端に考へると少くとも多くの場合に於て各文化特質の源流を唯一始源に求めなければならぬこととなる。獨逸のグレイヴナーや英國のエリオット教授の如きはこれであると思ふ。勿論此の學說に適合するものも少からぬが、同時に又最も簡單なる石器でさへも合理的に各別に發明されたものもあるのである。要するに此説は人智の能動的適應過程を看過してゐる點に於て不完全といはざるを得ない。

三は環境習熟説で、此説は第二説と必ずしも

反するものではないが、特に人類文化の起源及發達に於て其の本質となるものは環境に習熟することであると高調するのである。先づ最初の發明が「心理的偶然」か何かで出来たとする、然る時大切なことは其の新發明が出来るやこゝに一新環境が出来て有機體はこれに慣習的にそれ自身を適應させねばならぬといふのである。更に物質的文化の中に現れたる各新要素は環境をして愈々複雑ならしめ、その文化團體を組成する各個人の上に更に複雑なる反應を生せしめるのである。従つて文明を作り出すものは地理的環境といふよりも經濟的或は技術的環境に對する適應である。此學説は人類學者よりも經濟學者社會學者、特に經濟的決定論の影響を受けてゐる人との間に多く見る所の思想である。然し此説に對する反對は第二説の反對と同様になされる。即ち技術的環境は地理的環境の一變形で、それは文化に缺くべからざるものではあるが、然し決して文化を作り出す動力をもつてゐるもの

でない。

更に此學説の弱點を承認して環境と習慣とに加ふるに更に或る人間の本能を以つてせんとする一修正説がある。例へば熟練とか本能とか生れながらの他愛心、模倣、好奇心の如きものを以てしようとするのである。勿論人間の本能が文化發展に勢力を及すことは疑を容れない。然し上説の如き諸本能は人間特有のものでは無く人間以下の動物にて共通してゐるものである。故に此等の本能をもつて社會進化に一新形態を生せしめたものとすることは出来ない。

故に吾人が文化發展の理論を作るには人間丈けに限つた特質を以つてしなければならぬ。而して人類が他の動物と異なる特徴はその腦髓即ち概念作用及び抽象的思考を營む腦髓の高等なる中樞であつて、これあるが故に人間相互を結合する言語の力が成立ち、此の言語と抽象的概念的思考とが人間の文化的生活社會進化の基礎となるのである。ウイスマーによれば道具の案出其他言語、科學、藝術、道德、宗教等一切の文化

的產物は皆人間の理性能力の產物なのである。

この結論に十分なる證明をこの紙面に於て示すことは出来ないが言語の場合に就いては多少修正の案があるやうである。即ち腦髓が如何に概念作用を營むとも優秀なる交通手段を有してゐなかつたならば其の概念作用も何の用をも爲さねであらう。蓋し文化の發達には更に一層高等な交通の方法が必要であることが最も明瞭に知られるのである。言語は傳襲の運送具であり文化の發展は本質的に傳襲の發展又は社會學者の社會心と稱するもの、發達であるからである。換言すれば人間社會の文化は人間の高等なる知的發達によるよりもその強大なる社會生活によることが多いのである。人間の腦髓が高等なる發達をしたのはその先行者がその腦髓を以て單に物理的環境に對する適應機關としてではなく其の同朋に對する相互相應の器官として使用されたからである。

上説に適當の名稱はないが先づ文明の社會心理説といつてよからう。即ち此説の力説する點

は第一に文化が社會的事實即ち社會關係の產物であること、第二には文化が又觀念及び觀念の相互交通から生じたものであるといふことである。特に第二の點は屢々看過されるが文明の發達が人間の相互交通と伴つて居ることは物質的及び文化的人類學や人間歴史の記録を注意して檢べて見ると直ぐ分ることである。

而して此説は他の諸學說を有機的に結合せしめ得る利益がある。即ち此説は物理的環境、心理的偶然、本能、習慣等が文化發達に寄與することを否定しない。即ち此等のものは文化發展に對して其の刺戟、手段、又は材料となるのである。かくの如くにして此説は近代心理學が人間の腦髓を本質的に能動的適應機關とし、相互交通を以て相互的相應作用を生ぜしむる根本過程であると見る思想と能く一致するのである。

以上は米國社會學雜誌五月號に於けるエルウツド氏の論文の概要であるが、氏は尙その論旨を檢證せんとして産業及宗教等の諸現象に適用

し此等の現象が人間の合理的發明若しくは創造力等によつて先づ生じ次に此等が人間の相互交通によつて模倣排斥されて行く過程を述べ、そして其の模倣される所のものを氏は「模範觀念」Pattern idea と名け文化はつまりこの模範觀念の一大複合體であるといつて居る。今は只其の骨子と思はるゝ點を右に紹介した譯である。